

## 大東書道の回顧と展望

二〇〇三年十二月三日 於：板橋校舎・書道学科研究スペース

## 河内

本日はご多忙の中お集まりいただきましてありがとうございます。『大東書学』という学会誌を書道学科を中心とした大東書道学会が編集しております。その特別座談会として、「大東書道の回顧と展望」と題して、本日は先生方の忌憚のない御意見をうかがいたいと思います。第一部「回顧」、第二部「展望」として話を進めさせていただきます。「回顧」については、本学が一九二三年に創立されて今年で八〇周年を迎えます。そういう節目に当たりまして、学内でもいろいろな記念行事が開催されており、文学部書道学科・大学院書道学専攻といたしましても、この慶祝の年に、先生方からいろいろ貴重なご意見を賜り、また教学・研究に活かしていきたいと思っております。最初にご出席の先生方をご紹介します。

本学OB

西林 昭一 先生

書道学科主任

田中 裕昭 先生

書道学専攻主任

古谷 稔 先生

書道研究所室長

大島 守彦 先生

司会

河内 利治

それでは第一部「回顧」から進めます。大東文化大学に書道の教育課程が設置されたのは一九五三年（昭和二十八年）と聞いておりますが、そのころ入学され今日まで書道の研究をなされてこられた西林先生から当時の事を思い出していただきながら、お話をさせていただきます。

## 西林

昭和二十八年に、大東文化大学で書道の免許状が取れるという事で、僕の上京のいきさつは省きますが、大東は文学と政経の二学部だけで、その文学部も日文と中文の二つの学科しかなかったのです。二十八年度は松井如流先生、山崎節堂先生、上條信山先生、それから真田但馬先生の四人の先生方が専任でした。二十九年春から、宇野雪

村先生、熊谷恒子先生がお見えになって、私が卒業するまではこの授業だったように思います。非常勤でどなたがいらっしやったか。例えば青山杉雨先生がいらっしやったのは、私が卒業した三十二年に夜間部ができて、私の記憶ではそちらの方で非常勤として教鞭をとっておられたようにうかがっております。これは大島さんの方で調べていただきたいなと思っております。学生数も卒業するまでで、一年から四年、日文中文あわせて、書道の免許状を取ろうと入学した者は六十人いたかどうか。一年生の者が四年生の授業を取りに来てもいいし、一年から四年まで仲間内みたいな感じだったんです。ですから書道部というのは無かったんですね。それと昭和二十九年だったか三十年だったかに、「関東大学書道連盟」というのを、これは飯島春敬先生のご長男で早くに亡くなった飯島太久磨さんの胆煎りで作られた。小さな集まりでしたけどあったんですよ。私もそれに出品してましたから。要するに作品を持ち寄って勉強会みたいな形だったんですよ。一応展示なんかもしました。但し、正式になったのが今おっしゃった年じゃないでしょうか。と言うのは、僕もこの辺のことは定かじゃないので、林蕉園さんに電話で聞いてみましたら、「お互い学校間で内輪もめみたいなものがあったが大東が抜けちゃったのよ。覚えてないの」って言われました。抜けた年も何も覚えてないんですよ。ただ再編成したんじゃないかとおもいます。

田中

多分そうですね。永井暁舟先生が中心となっておられました。

河内

本学で教鞭を長い間執られてこられたと思うんですけれども。

西林

東松山校舎ができた昭和四十二年から非常勤講師をさせてもらいました。

大島

私だまされて「山」に来た一期です。

田中

はじめは先生は松山でしたね。

西林

そう、松山できたからあっちへ行けと。真田但馬先生が広い視野で目配りなさったんですよ。一つの団体に所属

してる先生方ではなかったんです。前衛の宇野雪村先生も昭和二十九年に出講なさったのは、僕は真田先生の広い見識だったと思います。だから僕たちは、あの先生には馴染めるけど、この先生には馴染めないのがあってですね、先生が反面教師であられる、それは大変いい組織だったのではないかと思えます。回顧すれば一色に固まってるない教員構成だったと思います。だからあの四十二年の時もですね、非常勤に安藤搦石先生、佐々木寒湖先生も入られましたし、今関脩竹先生、浮乗水郷先生が仮名でおいでだったですね。真田先生がまだいらしたから割合目

配りができたのですね。真田先生自身は中国文学の専攻です。ただ書論をやっておられて、今もある「書道」「五禾書房」の桑原喬林子と仲良しなので手伝いをしていて、書壇と密接な関係があられたんですね。細かい事情は知りませんが、そんなんで割合広く目配りできたんだらうと思うんです。

## 河内

ありがとうございます。大東の草創期の話をいただきまして、懐かしい先生方のお名前がいっぱいでて来ました。日本文学科あるいは中国文学科で書道の教育、卒業生としていっぱい本学では活躍されている方がいるんですけれども、そういった教学を助ける意味でも、他の大学に無い「書道文化センター」が一九六九年に開設され、一九八八年から「書道研究所」がスタートしました。文化センター時代、教育課程が五十三年に開設し、文化センターが十六年後にスタートするわけなんですけど、そのころから研究所の立ち上げを通して、本学の卒業生でもあり、また研究の補助として支えてこられた大島さんのほうから回顧していただければとおもいます。

## 大島

まず私は、先ほど西林先生がお話なされましたように、大東文化が急に大きくなった昭和四十二年に東松山校舎の第一期生として入学しましたので、その年から急激に学生定員が増えて、先輩はいない状態で、良く言えばノビノビと、悪く言えば不躰に育った世代って言われるんです。人間も多かったせいかな学生たちもまだ非常に元気がありまして、一つにはまだ学生運動が非常に盛んであった、学生運動最後の世代です。特に僕らの世代は地方からの出身者が多くて、書道を習っているというと親が安心するから書でも習っておこうかみたいな不純な動機が僕にはあったんですが、全国から書道をやろうという人たちが多く集まって来たと思います。世代的に言えば、大東文化大学の第二世代だと自認してらるんですが、だいたい大東文化大学を卒業なさった先生たちの教え子が多く集まった時代だと思えます。当時松井先生、今関先生は未舗装の雨が降ると長靴じゃないと通れないような中をおいでいただいて、非常に楽しい中で勉強させていただきました。途中お亡くなりになった先生方もいらっしゃいました。先程西林先生からお話があったように、安藤搦石先生、佐々木寒湖先生、今日で言えばいろんな会派といえますかニュートラルな環境で、まだいい悪いを分からないながらもいろんなものを体験させていただいたという時代だったように記憶しています。ひとこと言えば僕たちが習った時代は、「大東のヒーローの時代」って私は個人的には言うのですが、大物と言われる人たちがたくさんおいでになりました。熊谷先生、宇野先生、上條先生、青山先生、今関先生とか。当然これは松井先生がトップとして組まれた形であったんですが、ちょうど明治末期から大正

初頭にかけて生まれられた方々が集中しておいでになった時代です。学生時代は、今思えばとんでもなく偉い先生方を見て育ったんだなあというのが僕らの時代です。決して教室は綺麗ではなく、教室に水道があるだけでしたけど、みんな理想をもって元気があった時代だと思います。

## 河内

学生時代の回顧をしていただきましたけど、大学にお勤めになってから、あるいは書道文化センター、書道研究所にお勤めになってから今日まで本学に残られてずっと見てきたと思うんですけど、その立場から見えてどうですか。

## 大島

書道文化センターは私が大学二年生のときに出来て、大東でははじめ法人の組織として出来たんじゃないかと思えます。青山先生と永井先生が中心となって計画されたことですが、まだ大東も豊かな時代ではないので自分達で何か仕組みを作って少しずつ書道環境を良くしていこうというお考えが根本だったと思います。ご縁あって僕は卒業とともに大学に残りましたけども、その当時の大学はまだ全く書道環境は整っておりませんで、私たちの部屋にあったのは書道全集と名品叢刊しかなかったかなと。そういうまだまだという状況でした。仕事は僕たちのころは沢山あったのですが、急に残らないかと言われたんで、まあ三年も働いたらと、いい加減な形で就職したんです。実際は昼夜無く、祝日は行事でと言うような中で、多分労働基準法には違反してたんだろうなって思えます。ただみんな若かったし元氣ありましたから、少しでも良くしていこうって言う中で雑誌の刊行とか講習会や展覧会をやったりということでした。で結果的に振り返りますと、やはり十分ではなかったかもしれないですが、幸いにも赤字決算することなく今日まで何とかやってこれたと思っています。研究所に変えることは当然学科に先立って進めたことですが、まず附属事業からどう脱却していくか、附属事業をやってる限りはサービスがメインになるのはやむを得ないんで、少しずつ教育研究の方にシフトしなければならぬという反省からおこったことです。

## 河内

そのあたりは第二部展望の方で。ありがとうございます。

## 西林

ちよつといいですか。今のに関連して。じゃあ大学に研究的機関がなかったかというところじゃない。「大東文化大学東洋研究所」というのがありまして、書道文化研究会というそれを、昭和三十六年に松井先生、宇野先生、真田先生が中心で立ち上げて、東洋研究所の中に所属したわけですね、研究部門を。『東洋研究』という雑誌は今も出てるんですね。

大島 出しています。

西林 第二・三号これが合併号で、その次が第八号「特集書道史」という。この間飛んでいるのはですね、東洋研究所も予算のことがあって、特集的なものは経済部会というような話になったようです。事務局を大久保達正先生が担当しておられたと聞いた覚えがあります。そんなことで、三十三号まで飛び飛びに書道関連の論文が、五、六号に載ってるわけですけど、少なくとも一九七三年までは東洋研究所の中に書道研究部門がありました。それだけ補足します。

大島 私も先生方がご執筆になった書の号だけを抜き取って持っています。

河内 どうもありがとうございます。それでは次に本学の卒業生でもあり、書道学科の開設の準備から携わってこられ、初代学科主任として二期四年をお勤めになっておられます、田中先生の方から完成年度を迎えるということで、書道学科の四年間というものを回顧していただきたいと思えます。

田中 あの今、創成の頃のお話を聞かせていただきましたが、やがてそれからずっと永く大東書道の伝統が続いていくわけですけれども、その中で日本文学科と中国文学科に、少し授業の免許に対する変動がありましたので、その辺をちよつと追加させていただきます。一九九六年、平成八年に日文では書道の卒論を一旦廃止しました。ところがそのあと二年後に日本文学科ではいち早く書道ゼミを新設しまして、書道ゼミの学生に関しては卒論OKというカリキュラムになりました。それから、中国文学科、日本文学科両学科とも、書道の教免の単位十単位を取ったものは二単位を卒業単位に入れる形をとっておりましたが、この平成八年を機として全部取ったものはよろしい、卒業単位に組み入れましょうと、そういう体制を日文も中文も取りました。そしてその後二〇〇〇年の四月に書道学科が開設されますと、書道学科の乗り入れもいろいろ協議の上完成して、現在は中文・日文に関しましては、かなりの書道科目が、中国文学あるいは日本文学を学びながら取れるという、そしてしかも卒業単位に繰り入れるという形を踏まえることになりました。それでも書道学科をという声が大きくなり書道学科をスタートさせました。一期生が五十名定員のところ五十二名ですかね、なかなか優秀な者を迎えることができましたから、その彼らの一期生というプライドなんですよ、かなり頑張りを見せ、例えば課外セミナーとか或いは夏の錬成とか、新入生を迎えるための作品展の制作とか、そういうことにも学生が全力投球してやってくれました。入学試験も、いろんな入

試方法で受け入れてます。二科目受験で入ってくるものは実技が見えていないわけです。そういう学生が果たしてどうかと心配しましたが割合順調に進んでくることができたようです。二年目からはセンター入試を取り入れ、書いた経験の少ない者も入っておりますが、学問的な面に積極的に取り組んでいる学生もおります。二コース制というものを三年生からとっております。この両コース共に学生が積極的です。書学コースだから書作しないとかではなく、そちらの方の授業も積極的に取り取りますし、その反対に書作の学生も、書学の方の周辺教科も取るということ、かなり積極的な対応をみせながら進んできました。書道学会も発足し、学会委員の選出などは、率先して自分達が手を挙げて委員になるというような様子で、彼らは学会委員のみならずクラスのこともお世話し、リーダー的な存在で今まで進んできておられますので、このかたちはよろしいのかなと思っております。それから二年次には国内文化演習、三年次には海外研修とこれもかなりの人数が参加しました。中国へ行ってきたことは彼らの心中で大きな勉学の支えになっているようです。今年度は残念ながらサーズ問題で九月には行けませんでしたけれど、三月に実施の予定です。こういう研修も今まで中文では語学研修としてやっておりましたが、学生たちから話を聞くと、なかなか参考になったとのことですので、この方法は良かったように思います。それから特に本学では、学生が私たち教員の評価をするという授業評価が行われています。その評価を実際私たちが受けますが、手前話で恐縮ですけども、書道学科担当の先生方皆学生の評価が非常にいいということです。悪いところは改善をするよう先生方がするんですけど、自分達の自己評価をする、自己点検ですね、こういうことも今やっておりますので、学生の評価と私たちの点検とをうまく合致させながら展開をしていかなきゃいけないんだということを教員達もみな自覚して進めています。いよいよ卒業を迎える段階がきましたので、この四年間は長いようで短かったと思いますが、実は今、卒業研究に取りかかっています。これが一番気がかりなんです、作品制作とそれから卒業論文、この二つが見事に出来るかどうか、それを心待ちにしています。学生の準備状況や仕上げ状況が遅いのかなという懸念もしつついる時期です。一期生就職問題に関しましてはまだそんなに十分とは言えませんが、自分で見つけたもの、あるいは教員側から道を開いてもらったもの、自分でパソコンでアクセスしたもの、いろんなものがありますが、目指す方向へいけそうなものと、中には割り切って方向転換をして企業へという他学部他学科と同じようなものもいるようです。もう少し状況が好転してくれればと思っております。これが当面の気がかりな問題です。以

上ですが何かありましたらまた補足をお願いします。

河内 先生の学生時代はどのような先生に習われたんですか？

田中 これは、西林先生のおっしゃっていただいた先生方のすぐそのあとといえますか、私が昭和三十三年の入学です。ほとんど同じ先生方がおられたんですよ。一番に真田先生のお話があったように、私どもに非常に懇切にご指導いただき、卒論の指導はもちろんのこと卒論の発表会等先頭にたってお進めになっておられました。それからありがたいかかったのは西林先生や亡き足立野山先生、もう少したってから永井先生がよく面倒を見てくれました。特に西林先生の場合、私も何回か出席させていただいたんですけど、書論の輪読会を開いておられて、それに参加させていただいて初めて書論の勉強というものを教えていただいたことがありました。書道部も三十三年に私が入学したときにありました。書道部の合宿が続いて三十四年。全国展も三十四年ですね。スタートしました全国書道展、そのころは学生の手で大学側がさせてくださり、学校側が応援してくださったということで、大西先生から、大変にご指導いただいたと記憶しております。合宿にも時々きていただいたんですけども、そういう後に理事長先生になられましたけど、そんな時代でしたね。ですからほとんど、西林先生、それからその後の足立先生、永井先生、そういう先生方が進めてこられたところをわたしたちは追っかけていったような感じですよ。

大島 今日の大東の書の基盤は、この青山先生・永井先生の時代に築かれたと思っております。

西林 ここに持参したのは同期から送ってもらった、「大東文化大学書道部OB会」という名簿です、これが昭和三十七年度卒業迄あるんですが、その中の会員名簿が三十七年度が最後になってますから、昭和三十八年に書道部のOB会ができました、真田但馬先生が音頭をとられて、書論の輪読会をしました。あまり人数は来ませんでしたけども。ここに役員の名前が出て自分の名前が出てくるのが面映いんですが、会長が上條先生、副会長が私と永井さん、会計にはここにいらっしゃる田中先生も入っていらっしゃるという組織でした。OB会ってというのができて、できるだけ学校とのつながりを緊密にという動きがあつて、学会があつたんです。というのは、昭和四十一年の「大東文化大学書道学会」の発表資料が出てきたんです。学会は何回かあつたんですが、OB会もあつたし、書道学会の発足も、もうちょっと前のはずなんです。何人も発表して、僕はその前にも一回か二回発表してるわけなんです。それからご存知でしょうか、須羽源一先生、昭和十九年度の高等学校第十八期卒業で、京都に住んでいた



(上下2枚の写真は西林昭一先生のご提供による)



んですけども、上京してくださって発表されました。それが四十一年の前なんです。なんで四十一年の前だってわかるかっていうと、私、「康有為の書論」というのを発表した後で『東洋研究』に載せてもらったんじゃないかって思うんですよ。だからその前にも学会があつて、五・六十人は集まったかと思えますね。

河内 今日ある大東書道学会が、実は既にもう三十六年以上も前にあつたということですね。

西林 あつたんですよ。それがね、我々が中心になってやるんじゃない。永井氏が中心になって汗かいて下さっていた。しかし、永井さんが大変忙しくなつてきて立ち消えになつたという経緯なんです。つぶしたんじゃないくて、結局歯車を回す人がいなくなつたわけです。

大島 仕事をした最初の直接の上司が永井先生で、その時の所長が青山先生でした。当時永井先生に僕、「今これだけの先生がいても必ず定年を迎えるから、このまま放置すれば一流から三流に簡単になりますね」って言っております。今までそういう気持ちを持つてずっと過ごしてきましたね。

河内 永井先生の存在は非常に大きかつたということですね。

大島 大きかつた。

田中 大きいですよ。教育学科の書道ができたのは、永井先生の尽力ですね。大東の卒業生についてよく話が飛び込んて来ます。あなたは大東からきた小学校の先生でしょ。では書道書けるでしょと言われ、書道学んできていませんととなると、それでは困るって言って、全国の教育学科で一番に授業をおかれましたからね。これも一つの先生の業績です。

河内 本場に立派な先生ですね。

大島 たぶんですね、非常に家庭的な環境の中で育つてこられた西林先生から田中先生たちの世代が終わつて、僕たちの時から急に牧場みたいな大学になつてまいりましたね。書道部の部員が四五〇人とか、とにかく一学部分からいいましたね。そこには毎日書道展の全ジャンルの人がいましたね。

田中 その頃は毎日展だったからね。

大島 大東の気風が自由だった。そういうことがわかると思うんです。もちろん大東の先生に習う人もいたんですが、上田桑鳩先生とか手島右卿先生とか、うちの先生じゃない先生のところにもいっぱい習いに行つてましたね。

西林 それと夏季講座をやったでしょ。昭和四十年。僕もね若造なのにね、自分なんか教えられないって恐縮したおほえがありますよ。そういう仕掛けもね真田先生がやったんじゃないかと。

大島 私たちは真田先生に習ってないんですよ。お葬式にお手伝いに行っただのが初めての出会いで、急遽春休みにお亡くなりになりましたので、下足番に行くようになって電話が来て行った覚えがあります。実際は真田先生に教えを受けるってことはありませんでした。四十三年の春でしょう、お亡くなりになったのは。

西林 「大東文化大学書道部OB会」名簿によると、真田但馬先生が一番のOBです。高第十一期で、昭和十二年度に卒業しておられます。上條先生は昭和十七年の卒業なので、十六期と書いてあります。

田中 真田先生はこの高校の先生方もみんな覚えてらっしゃるんですよ。おまえどこの高校だ、じゃおまえのところの先生は彼だろって。

大島 私たち古い先生方のことは記念誌でしかわからないんですけど、書道について本学が今日こうあることは真田先生と上條先生のお力によるところが大きかったようです。

田中 先輩達が、大学を出て、高等学校に行って書道の学生をずっと今まで送ってくださっている。それが強いですね。うちの学校の場合、だいたいそういう学生がきています。そのOBの方々が今四十年代、五十代になって、頑張ってくださいっているというわけです。OBとのつながりによる連携が非常にうまくいっていると思います。

河内 その話まだまだお聞きしたいんですけど、そのもうひとつ新しく今年度から大学院がスタートしたわけですので、その部分についても回顧という、まだ回顧するほど歴史が経ってないんですけれども、学科との連動も踏まえて、そのあたりから古谷先生お願いできますか。

古谷 私は、大東文化大学にお世話になってからまだ四年目で非常に体験が浅いです。しかしながら、書道学科を設置するということ、かなり前から関係者の方々が奔走されていたことを聞いていましたが、その当時から大学院の話は出ていたようです。つまり大東文化大学は書道に関するすべてを踏まえた上で、グローバルな視野のもとに書道文化を確立していこうとする熱き思いが、設置に至るまでの計画書等の記録をはじめ、先生方や大学関係者の話を拝聴すると、強く実感してまいります。書道学科では、書道を軸として書学と書作の両輪のバランスを保ちながら、広い視野に立ったカリキュラムの中から各学生の目的に応じて自由に科目の選択ができ、卒業後の方針に向け

ての基盤づくりが可能です。四年間の学業を修めた後、さらに専門的に学ぶために十五年度から大学院文学研究科書道学専攻修士課程が設置されました。大学院はまだ暗中模索の状態ですが、期する方向性はおよそ定まりつつあります。現時点では、書道学科を基礎に立ち上げられており、院生は四つの演習科目―中国書学・日本書学・中国書法・日本書道―の一つを選び、二年間にこれらの書学または書作を深く掘り下げて研究し、成果をまとめることとなります。大学院では書道学という一つの学的体系において概観すると、現在残されている中国、日本を中心とした文化財を基盤として、そこから書跡そのものに注目し、それらをいかに研究対象として書学に取り込んでいくべきか、そして、それらを書作にいかに関与させ、新しい書の文化の創造につなげていったらよいのか、といった課題が見えてきます。つまり、文化財、書跡、書学、書作、というものを見据えながら高い見識と広い視野に立ちたいリーダーとなりうる人材の育成を目標にしています。今年には九名の修士課程の院生が入学しました。院生は非常に熱心で、本学だけではなく他大学からも、何名か入学しております。そういう仲間が混って勉強することによって、刺激し合うことにもなります。授業のみならず、やはり大学院では、自主性がすごく大事になります。そこで大学院生主体の『書道学論集』というものを年一冊刊行することになっておりますので、その中で、各自の研究の一端を示すこともでき、それとあわせて実技の内容も充実していくことと思いますが、成果はこれからでしょう。どうもありがとうございます。回顧というよりもほとんど展望へ繋がっているお話でありました。本学の展望だけではなく、日本全体の学術レベルに関連するのではないかと思うんですけど、以上で第一部の「回顧」の部は終わらせていただいてよろしいですか。どなたかこれだけは過去の事で言っておきたいということはございませんでしょうか。もしなければ、第二部へ入らせていただきますが。

## 河内

回顧の補足、六〇周年のことをちょっと。六〇周年の時ですね、当時学長が香坂先生、中国語のご専攻の先生であられたこともあって、中国で大東文化大学中国書法展というのを実施致しました。中身は本学の先生方、それとOBの方々の代表、それと学生の代表の組み合わせで作品を持って行きました。北京展は北海公園の上の廻廊で、上海は少年宮の廻廊で作品を展示しました。何万人が入ったとか中国の新聞がとりあげたんですが、なんせ無料です。何万人が入ってもなんら不思議ではないと思います。両方の展覧会、特に北京の方はですね、ラストエンペラーの弟であられる愛新覺羅溥傑先生がこの展覧会にタイトル横断幕を揮毫してくださいました。ちょっと予定外

であったのが、私どもは行けば手伝う人はいるからと言われて行きまわしたところ、誰もいないで、一緒に行ったO B達の協力で何とかやってしまわなくちゃいけなかったというおもしろい経験もしました。北京展のセレモニーのために学長、あと所長である青山先生が参加しまして、その会場の脇でセレモニーと揮毫会をやりました。その時は、非常に盛大な対応をしてくれまして、歓迎の宴は人民大会堂でやってもらいました。すごい建物だなんてビックリしました。その日、にわか雨が降ったものですから、廻廊にかけてあるものは大丈夫かということで、急いで見にいったことを思い出します。その後上海展を前に、上海は理事長代理として山井湧先生がおいでになるということが決まっておりますので、山井先生ご夫妻と同じ飛行機で上海に向かうことになりました。山井先生は以前に溥傑先生のお嬢さんを日本で教えられたというご縁がありました。上海展は青山先生に変わって浅見先生が団長としておみえになりました。私は担当者ですので会場管理で現場におりましたが、そのセレモニーに参加してくれたOBの方々や先生達は、北の方は永井先生が、上海の方は浅見先生が引率をなさって記念旅行をされました。上海から帰ってくるときに、上海の全青連から集雲閣と言いましたかね、篆刻のお店がありまして、そこで手配してくれた記念の印を皆に頂きました。それがなかなかすぐ立派なのから、こりゃないだろうっていうくらいのもので様々なのがあって、結構楽しめました。OBの方々に快く協力して頂いて、一応面目を果たして帰ってこれました。非常にありがたかったと思っております。

西林

僕も出品しましたが、だいたい何点くらいだったのですか。

大島

六十点ぐらいじゃないですかね。向こうに全部軸装で持ち込みました。

田中

泰山も行ったんじゃない。

大島

はい、それは北の方のコースの方が泰山へ、私は現地において、起こることに対応するのが仕事で、宿舎も今日からここは空いてないからこっちに泊まれとか、そういう状態でした。でも、とても変化の多い日々で思い出がいっぱい。それが楽しいことでした。

田中

今年が創立八〇周年です。大学では先生方の『大東書道』のお手本で頂いたのを作品にしたのがあるんですが、現在の先生方の作品をもう少し収蔵して鑑賞教材にしていきたい。そういうことも兼ね合わせて展示が出来たらなあということになりました。そしてさらに、四十五回を数える伝統の全国書道展の中から理事長賞以上のものをピッ

クアップして高校生のレベル、あるいは大学生のレベルがこうだということと一緒に紹介することにしました。大東へ迎えることの出来る高校生も混ざっているようなので、そういう企画が出来たらなあつということ、それを十二月に、今現職で専任・非常勤として来て頂いている方に限らせていただきました。いずれはもう少しなんかの折に幅を広げて開催したいという感じも抱いております。そういうことで、いい展覧会といい作品をご寄贈願うという企画になりました。

### 河内

はい、「回顧」の補足をして頂きどうもありがとうございました。さらに色々思い出したら随時お話し下さい。それでは、将来像ということで日本全体の学術あるいは芸術、書道の高等教育、そして大東自体の組織から教学、研究の面について、どういう観点からでもかまいませんので、ご自由にこういう風な方向に大東は向かってほしいという、すでもうそういうお話がございましたけれども、希望を含めてここでそれぞれの先生方からお話いただければと思います。

### 古谷

先程言い残したことですが、大学院で四演習の他には、中国書学書法特殊研究・日本書学書道特殊研究・中国書法文化特殊研究・日本書道文化特殊研究、それに東洋美術史などの講義科目があり、また、今まで本学になかった文化財保存学特殊研究・文化財保存修復特殊研究、も加わり、そこで文化財に対する認識を実習によって理解できることを目ざしています。さらに、書写書道教育特殊研究も、要になる科目と思います。このほか、大東文化大学の伝統的な日本文学・中国学各専攻の関連科目も用意されており、かなりの充実度が窺えます。なお学内外の強い要望もあり、目下、博士課程（後期課程）設置に向けて準備を進行中です。

### 河内

日本全体ですね、学問領域といえますか学術領域といえますか、そういう視点において、書道学のスタートと言いますか存在といえますか、そういうものがどのように位置づけられて行くべきか、あるいは将来どうあるべきかみたいな考えはございますでしょうか。

### 古谷

修士課程を設置するにあたり、一般用に説明するために作った書道学の体系的体系図という図面がありますが、そこに書道学に関連する、人文科学のいろいろな学問領域、たとえば、美術・美学・哲学・文学・史学・教育学などは、それぞれ何らかの形で、書道学との繋がりがあると思います。今後はそうした関連の中で書道学を位置づけるべきではないかと思えます。

河内

西林先生、本学の組織ではありませんけれども、日本の書道学、あるいは書学の、あるいは書道史学の学会の長として、長らく務めてこられておられると思うんですけども、そういう立場から御覧になられて、大東の研究、あるいはその高等教育に対して何か御感想なり御意見ございませんでしょうか。

西林

実は私、同窓から選ばれて大東文化学園の評議員を昭和五十七年からやらされて、それから理事を六年目から平成三年までさせていたでいて、その間に、書道学科設立をということをして、理事会でさせてもらったことがあるんです。その教員から選ばれた理事の先生からですね、いったいどの研究分野でも学会というものがあられる、書道学会というものはあるのか、というきつい質問がありました。いや、ないではありません。大学書道教育学会という、いやそうじゃない、学術レベルではあるのか、と。まあ苦しい答弁をしたことを思い出します。理事になった間際位、平成三年か四年だったかと思いますが。そんなこんなでその頃「書学書道史学会」の責任者をしておりましたので、学会事務局長の萱原さんという頭脳明晰な方で、よく目配りが出来る人に、色々調べてもらった結果、日本学術会議の中でも書というものの市民権が得られていないという、非常に悲惨な思いをしたことがあるんです。例えば、大学の教員にある年一回ですか、三年に一回ですか、自分の研究を文部省の何とかという外郭団体が調べるといふのがありますね。あの中の部門に書という部門はないじゃないですか。どこへ自分が入るんだろうと。歴史しかないのですかね。

古谷

現在、書学書道史専攻の場合は、美術史の領域に入ると思います。

西林

そう、そうなっちゃう。ということではですね、要するに学術論文では、未だに客観的に見て、書は市民権を得ていないということなんです。これをですね、何とか打開してやってかなきゃいかなんというので、学術会議に登録する学会として、学会創立後、五、六年たった時に、書学書道史学会も登録メンバーになったわけですよ。だからまあ根強く、一人一人が腐らないでやってかねばならない。自分が書の研究を主にやっているというつもりでも、一つも、と言っては少しオーバーですが、学術としての認知のされ方が非常に少ない、というのが僕は未だに現状じゃないかと。もつともつと一人一人が努力しなければならぬという気がします。それから古谷先生のお話の中で、文化財というものを基礎として、書学と書作というものを両輪にし、書の芸術的な価値というものを高めて行かなきゃいかなのだと、それが本学の使命でもあるんだ、とおっしゃいましたが、これは日本の全体の書の芸術

学術という面でも同じだと思っんです。例えば、日展に書が所属しているから、書が評価を得ていると思ったら、間違いですね。これからいよいよ少子化に向かい、それから高等学校教育、小・中学校教育の中で、書写、あるいは芸術科書道がいったいどうなっていくんだ、という暗澹たる先行きしか見えて来ないような気がするんです。そういう時に、どんなところへ根ざして進むべきであろうか、あるいは書に関わる学術面を進めていくのか、というところは今、必死に考えなければならんと思うのです。そういう点ですね、僕は一番欠落しているのは、書の歴史という分野は割合に中国でも日本でも厚い層があつて、研究者もいる。しかし、「美学・芸術学」という、書の美学、書の芸術学的な展望、あるいはそれを深める研究というものが未だにない。僕もある時期やりたいなあと思っただけけれども、とても私の力では出来ない、大変難しい問題があるわけですから、そういうところを視野に入れながらやっていかないと、書というものが、学術の面でも芸術の面でも岐路にあるという気がするんですね。話がちよつと大まかすぎるんですけど。

河内

はい、どうもありがとうございます。

大島

私もちよつと言葉は違うんですが、きつと同じ思いなんだろうと思っいます。若い頃に西林先生にお話して笑われたことがあるんですが、青山先生を怒らせたことがありましてね。書の芸術性を先生は僕に説いてくれたわけですけど、「論理的にはそうなんですけど、書そのものが、作家の生命を乗り越えて社会に生きていくという環境が整わないうちに、作り手が書は芸術だとは言わないほうがいいと思っいます」といったら、すごく怒りましてね、「一発じゃないかないんだ」って。確かに僕も若いからむちゃくちゃ言っただのかもしれないけど、その疑問は未だにありまます。なんとかこの書を内側から立てようとするだけではなくって、社会的な整合性とか、社会のどこに場を獲得するのか、また人材もどういうレベル保障して出すのか。社会とともに生きていくための、ある種の説明不足みたいなものを感じていまます。もう一つは色々な展覧会をやっているけども、評価基準が全く明らかにされてない。結果だけが出てくる。大東には沢山書の先生もおいでになりますから、現代の言葉で少なくとも大東ではこういうもので書の良し悪しを考へていまます、みたいなものが出されていつてそこに反対意見があつてもいいと思っいます。教育もそうだと思っいます。情報の提供をした上で公平に評価するっていうものがあつて初めてシステムとして成り立つわけですから、書が何でいいものだっていうことが、書をやらない人も聞けばわかる日本語で説明される必要

があるんじゃないかと思っています。そういうことを果たしていかないと産業構造で捉えれば書は明らかにシルバー産業化しています。データによりますと、二〇二五年には老人人口比率四八・五パーセントです。それは十五歳から六十四歳までを生産人口として考えた場合の比率で、そのデータの裏側に十五歳未満の子供がいることを考えると、一人働いて三人も暮らしていかなきゃいけない時代がもう目の前まで来ていると。そういう中で、平和で、余力がなければ出来ないに決まっているわけですから、書も社会環境と一緒に生き残っていくための戦略が今求められているんじゃないかと思います。

西林

もう一つ、書の社会的な価値という点でのマイナス面を言いますとね、もう三年前になりますが、日本で書学研討会の国際会議を開催しましたね。あの時にその資金援助を企業に求めようと思って、僕もいくつかかりました。その前ですとね、各企業が色々な面に援助しているのが、一冊の本になっている。値段は覚えてます、八千三百円。とっても厚い本ですよ。それなのに、書っているのは一つもない。

大島

メセナ活動ですか。

西林

そのメセナ活動の中で一つもないのは、彫刻と、書なんです。で、文化面への支援は、そのページ数でいうと、ほんの僅かなんです。音楽とか、体育とかは比較的多い。絵の方も。書っているのを知ってもらえてない、ということとは悲しい現象だと思います。いや、もつというならばですね、例えば医学とか、科学機器的なコンピューター関係とかつてのは、何十億というような企業からのそれがありますよ。けれど文化面はもう全体の中でこんなちょっとした支援。そんな中で、芸術つてのは、またそのほんのちよつと。そういうことですね、日本の企業、ひいては政治が文化に対して冷淡なんです。こういうところも打開していかないと。根っここのところを働きかけていかないと、人口が減っていく中で、学生たちも受け皿がなくなっちゃうんじゃないかという危惧がありますね。

田中

受け皿はね、今本当に書道をやって来たの、というような感じで、一切役に立たないっていう感じがいっぱいありますね。もう一つ、今先生がおっしゃった中で、書教育がね、もうそれこそ今回の改訂では小学校、中学校では、ぐつと縮小しましたから、余計にそういう社会でのこれからの将来のアピールはもつと少なくなっちゃうんじゃないかという懸念がもちろんある。それからもう一つ、送り出す側としてですね、今こういう人物像を作らなきゃいけないか、という中で、やっぱり例えば、書作に挑んでいるものは一派一流に偏っていたんでは駄目だ、



ということですね。授業ではややもすると、田中が教えていけば田中流に全部なっちゃうんじゃないか、というような懸念もなきにしもあらず、それを極力抑えなければいけない。そういうことを絶えず考えながら今やっておりますけども、最たるものはゼミだと思うんですよ。ゼミを間違うとね、全部同じようなものが生まれて出てきちゃう、これを今一番大事にしたい、と思つて制作ゼミでは心掛けています。そうしませんとね、それは外でも同じこととでね、今の社会の書道の作品の全体傾向を眺めると、みんな師弟関係で繋がっているようなものがいくつもあるっていうようなことになっちゃうんですよ。これじゃあ本当はいけないんで、本来はそういうものではなく、学校の教育の中に持ち込むべきではないし、大学院でもやっぱり同じだと思つています。それで大学院での書作の限界っていうものを感じていまして、むしろ大学院で深めるならば、書学の方をもっと率先するべき形をとることに賛成をしているんです。なんせそれぞれが持っている個性というかね、これをうんと大事にしてあげなきゃいけない、教えるものじゃなくて、大学ではもう自分から学び、そして自分から作り出してもらいたいというのが本当の姿だと思つています。一番のギャップは外に出た時に公募展とかそういうのに応募したいって時に、それで通じるかという、そこにまた今の国内の展覧会の面白くない仕組みがあると思うんですよ。今西林先生がおっしゃったように、日展がその全てのものではないっていうことと同じように、読売、毎日というのが、これがまた大きな分野を占めているけれども、これだつて決してそれが果たしていいのかどうかもわからない。だからそういう中で、本当に自分が向かっていける書風っていうか、そういうものを学生に作らせてみたいなと思つています。書道スタッフが皆そういう考えでいってくれば理想だなあ、ということを考えてます。学校の高等教育っていうのは今だんだん国立が縮小してらんです。教える分野をね。とにかく教員養成は私立になんていう。書道に関しては、国立の書道教員養成系の大学が統合される傾向にあります。それで私立の方でつていうことになりまして、余計にこちらが担当しなきゃいけない。せつかくこの大東の書道学科を出ても、すぐに指導の仲間入りが出来ないっていう需要と供給じゃないんですけど、需要していただく側がないっていうね、これもなんかもう少し改善されないものかと思うんです。実際現場に行つてみると、もう高校二年生は書をやらなくていい、という文部省からの指導体制になつてきているようですからね。

大島

あの、その中にいる人たちがばかりで考えてますから、割とシビアに話が暗くなりやすいんですけど、ゲームとい

うのは分が悪い方が面白いって、常々思っておりまして、書道学科に入学して書を学ぶなんていかに贅沢なことかということをやさしく説く必要があります。もう一つは、僕はつき合いが企業人が多いですが、彼らがみんな言います。学部卒の学生に特別な能力を期待してない、やる気と人物だと。本当にこんな贅沢なものをずっとやりたいんだったら、食っていく逞しきくらい自分で考えてみるっていうくらいのことでも悪くはないのかもしれない。単一価値観で生き残るほどたやすい時代でなくなったことは事実ですけども、生きることと希望とを並行してできないってというのは全くないわけですし、希望さえ持っていればやっていけるはずだし、普通の人はなかなかチャンスを与えてもらえない贅沢なことをやってるんだっていうことを、今の言葉で説くことも大事かもしれませんね。第一、ものになるかならないかも解らないのに多額の金を出してやるってというのは愛以外にないわけですよ。極めて経済的合理主義に反することで、それを書道学科の学生は愛をもらってやらせてもらえるチャンスにあつて、また、学ぶ場には日本を代表する先生方が沢山いらっしゃって、良い思い出と希望を持って出ていけば、何やってもしなくて生きていけると思います。書をやった以上、書で食わさなきゃっていうことを考えると、非常に厳しいものになってくると思うんですね。社会教育に向かう人もあればいいし、書からデザインへいく人もいいし、私個人的に知ってる人ではモデルになった人もいますし、社長の秘書ですから、普通の学部能力をもって字もきれいに書くって喜ばれている人もいますしね。書も出来る人材を大東は送ってるんだという風に考えれば、と思いますよ。

## 田中

中にはあの、好きだから来たっていう子もいるんですよ。それで将来どうするんだって言ったら、好きだから好きでやってるだけだから、会社へ就職するってね、割り切ってる学生もいます。

## 古谷

今、学校教育で書道が、低迷して下降線を辿っていることを聞きますが、それならそれで、社会で、書の魅力をアピールすれば良いんですよ。それを先程西林先生がおっしゃっていた学問として、いわゆる美学とか、芸術論とか、そういう形で、耕していく。そういう研究者をそれぞれ大東から輩出できることを願っています。書の魅力を平易に説くことは大変でしょうが、自ら書学・書作のしっかりした体験を踏まえれば、古来の、中国、日本の書道文化の空間に展開する諸相を導き出すことが出来ると思うんですね。だから社会の中でそうした活性化が図られれば、今度逆にまた学校教育で、やっぱり書は必要欠くべからざるもの、ということになり、本当に書の価値というものが高められれば、必ず尊重されるはずですよ。パソコンでポンと文字や記号が出てくる昨今ですからね、書

を見たり書いたりしなければ文字は忘れますよ。ですから、書道単独の世界ではなく、美術ですとか、茶道ですとか、いろんな文化がありますが、そういうものとのパイプがすごく大事だと思えますね。書の捉え方が、いわゆる展覧会での壁面の作品だけで見るのではなく、他の文化との関連を深めていけば、もっともっと豊かな、誰もが認識し、親しめるような形に広がって行くのではないのでしょうか。

## 大島

私も今、社会人講座を担当してますけど、八十歳の方がお勉強にみえたり、皆さんご熱心です。今日までいろんな事があっても書は長らえてきているわけですから、良いものがなければここまで残ってこなかったはずですよ。ですから、大学の側だけから考えていきますと、十八歳人口とかが一番近くみえるわけですけど、そうじゃなくって、大学と社会との関わりの中で、大東の書道が社会に評価してもらえようなものであれば、ちゃんとまわっていきるんじゃないかと思ってます。ただし、その時代の趨勢っていうものがありますから、国立大学との関わりもありまして、田中先生はご存じのことですが、当初私たちは三十名で計画をしたわけですから、これからの環境を考えて、大きさと質との調和をどの辺で図っていくのか、これが大切なことではなからうかと思っています。

## 西林

書道学科を立ち上げる時のカリキュラムとして、デザインとかその他の科目まで取り組んでいるこの幅の広さはずっと充実し大事にしていくことが必要で、そういうところも視野に入れていかないと、学科としての独自性というものが、これからの社会へ発進していかない面もあるんじゃないですかね。今までのような観念では生き残っていけないと思うんです。博士課程まで出来るのならば、欲を言えば幅の広いカリキュラムがあつていいんじゃないかなというふうにね。

## 大島

計画の段階では、さつき先生がおっしゃいましたような、書の美学・書の芸術学等は考慮してカリキュラムに加えました。しかしデザインなどは、学生の学部段階での履修単位の関係で、芸術の問題と大学がつくる数量カウンターの問題とかがありまして、現在のカリキュラムでスタートしたわけです。もう完成年度を迎えたわけですから理想をもって壊していただいて、前向きに展開されてよろしいんじゃないですかね。

## 田中

こういうふうには全部網羅しているような形が見えますから、そうするとね、個性的な子が生まれなく成っちゃうかも知れませんか。もっと好きにとってもらって好きに自分の方向の選択ができたらと思います。割合型にはめちゃってるのかなってところが無きにしても非ずだから、もっと彼らが自由に選んで自由に学べるようなカリキュラ

ム編成が必要かもわからないですね。

古谷 書道学の概念を踏まえた上で、よく整理し、学生の要望、社会のニーズも考慮して取捨選択する必要もあろうか  
と思います。

河内 まだまだお話しは尽きないと思いますが、最後にお一言ずつご発言願えればと思います。

大島 書道学科には大きく期待しています。それだけです。

西林 書道学科を立ち上げるときに、OBの人たちが品川のホテルへあれだけ集まってくださった、これは母校に書道  
学科のなかった卒業生の喜び、その立ち上げに対する期待というものが、形として北からも南からも集まったと、  
こういう声を大事にしてもらいたい。OBの願いとして一つだけもうしあげます。

大島 非常にありがたいことです。

田中 希望をもって入ってきた学生達が、その希望をさらに膨らませて出て行けるように、言葉の上では言いやすい言  
葉かもしれないですけど、私たちがさらに努力を重ね改良して、これからの社会に対応できる学生たちをつくっ  
てあげたいと考えております。

古谷 学生もかなり希望を持っていると思います。新しい校舎が出来ていろんな設備も整い、図書蔵書数を見てもか  
なり書道関係が充実してきています。全体的に学生も学校側も担当教員もみんな前向きに少しずつ進んでいますの  
で、将来を期待したいと思います。

大島 一つだけ追加させてもらってもいいですか。大東文化大学に書道学科が生まれ、また修士課程から博士課程がう  
まれてこようとしている中で、ここから育たれた方が将来母校の教壇で後進を育てていただけるような環境  
が整うことを願っています。

河内 本日は長時間にわたり、貴重なご意見ご感想をお話しくださり、本当にありがとうございました。今日の先生が  
たのお話を聞いて、伝統と責任の重さを実感し、将来本学から立派な学者、あるいは作家が育つよう、微力ながら  
研究と教育に学生院生諸君と一緒に歩んでいきたいと思えます。まだ自分自身が研鑽を積んでいきたいと考えてい  
る段階ですので、そういう中で一緒に学生と共に本学の教学に努力していきたいと願っております。